資料渉猟余話

その54

比田井天来の来峡と二人の門人（前）

鎌倉貞男

先頃、南信州新聞社の小田嶋正勝氏がペンネームの嶋不濁名で『黄眠先生が行く―日夏耿之介残影―』を発行した。この本は、書名の通り飯田市最初の名誉市民日夏耿之介に関する新しい知識や情報が満載で、とても興味深い。

書中に下の写真が掲載され、著者は日夏の愛蔵印を彫った篆刻家中神岳卿を中心に述べている。しかし、私は別の立場からこの写真について考えてみたい。

実はこの写真には裏書があり、撮影年月日や人物名が明記されている。それによると、時は昭和十一年十月十八日、所は天龍峡の仙峡閣である。写真の人物は、左から宮澤秀臣・遠山白雲・比田井天来・大森万里（天来の随員）・中神岳卿・仙峡閣主人である。右六名の内、ここでは写真中央の天来と、その天来を師と仰いだ秀臣・白雲の二人について述べる。

まず出身地望月に記念館がある大書家比田井天来（鴻　一八七二～一九三九）である。天来は、あの天龍峡十勝の磨崖碑を書いた日を学んで新しい境地を拓いたと言われ、「近代書道の父」とも「開拓者」とも称される。門人に上田桑鳩・手島右卿・金子鷗亭等、著名な書家が多い。

年譜を元に、写真が撮影された前後の天来の周辺を調べてみると、郷里協和小学校で書道講習会、信州書学院創立（昭和九）・書の殿堂、鎌倉書学院落成（同十）・大日本書道院創立、『書勢』創刊、帝国芸術院会員（同十二）・万博顧問等委嘱される、発病、入退院、静養（同十三）となる。しかし、翌十四年早々に逝去。誠に惜しまれる死であった。

写真はこの天来が、二度目に来飯した折のものである。（因みに、彼が最初に来飯したのは、大正十二年十二月八日、郡役所で開催された書道講演会である）。当時の郷土紙「南信」によると、昭和十一年十月十六日に来飯した天来は、翌十七日、飯田商業学校講堂で開催された書道講演会に臨んだ。

この時天来を招聘したのは、北原代議士・小西町長・八木高等女学校長等であり、幹事として実務にあたったのが写真の宮澤秀臣・遠山白雲等であった。

こうやってみてくると、事の経緯や写真の意味がわかってくる。つまり、この写真は、翌十八日、秀臣と白雲が師の天来を仙峡閣の座敷に招いた時に写したものと思われる。更に言えば、これより以前、二人は天来に入門を許され、それなりの交流があったからこそ、こうしたことも可能だったことになる。実に麗しくも濃やかな師弟関係である。

かなり昔、私は二人の関係者から白雲・秀臣の師が天来であることを聞き知っていたものの、半ば忘れ、半ば怪しんでいたのであるが、この写真を目の当たりにして、再びその記憶は蘇り、上記のことを確信するに至ったのである。

仙峡閣における師弟（宮澤家蔵）